愛知工業大学研究報告
第２７号Ｂ　平成４年

学生相談室報告（１５）

Report From the Counseling Room (No. 15)

纐　纈　康　兵
Kohei KOKETSU

The Psychoanalysis theory by S.Freud is briefly mentioned in this note.

今回はフロイトの精神分析について雑感的に記してみたい。

現代社会がかかえる問題は、まさに多種多様を極めている。例えば、平和の題一つを取り上げて見ても、その問題は複雑多技に渡っている。そうした問題を一元的に解決する事は、多分、構造的に不可能と思われる。

今日、人間の本質に、又、人間存在の根源に関わる様な問題は益々拡大している。

筆者はここで、フロイトの精神分析なるものが、我々の現実生活に少しでも参考になればと思い、気ままに筆を取った。

フロイト理論は無意識と言われる大海を発見し、精神分析と呼ばれる新たな航法によって、人間（欲望）と現実社会との間に在る葛藤を乗り越え様とする水先案内とも言えよう。

（１）夢分析

よく言われる様に、フロイトの精神分析は夢から出発した。夢に対し、一般的には、夢は睡眠中の心理活動の結果であり、人は睡眠中にも、覚醒時とは異なるが、しかし同質の思考活動が行われているのであって、それは覚醒時中働らいている意識が、預かり知らぬ心的生活の存在によるものであり、又、この様な夢の行為は無意識界の事柄であると言われている。[1]

愛知工業大学　経営工学科（豊田市）

では、我々が日常の夢の観察によって得られる夢の特性とはどんなものか。

Ａ）夢を見るきっかけは、ごく最近の関心、諸印象である。

Ｂ）夢は材料として、覚醒時には重要と思われない子細な出来事を選ぶ。

Ｃ）夢は幼児期の細々とした事柄すら、記憶の奥底から引っ張り出して来る。

一体、こんな特性を持った夢の目的、存在価値は何か？それにたやすく答えてくれる夢もある。それは、身体刺激に対処する為に見られる夢と幼児の夢である。

例えば、睡眠中に渇きを覚えた男が、起き上がって傍らの水差しの水を飲むといった夢を見たとする。彼は夢に依って眠りを守ったと思われる。夢は彼の睡眠中に高まった身体的興奮に代償満足を与え、眠りたいという願望を充足させたのである。又、フロイトの千にも及ぶ夢の実例に依れば、幼児の夢は、前日の果たされなかった願望が歪みなく正直に顕れる。前日に少ししか食べられなかった苺を、子供は夢で、籠いっぱい食べてしまう。が、大人が普通に見る夢はそれ程単純ではない。夢が意味と目的を持つ場合、無意識界の何らかの意向、作用により、夢は歪められ、奇妙なものにさせられている。

フロイトは、この夢を歪めてしまう作用に抗し、夢を見た人は自己自身が夢の意味を知る事が出来ないと思い込んでいると言

う前提に立ち、精神分析の技法を提案した。それは、夢を見た人、その本人に意味を言わせ、本人の心の無意識と呼ばれる部分へ、あらゆる抵抗に対処し、本人自らを進ませる事である。

フロイトは自らの夢研究に於いて、夢は確かな意味と目的を持っている事を確信し、期待する事によって、夢判断と呼ばれる一つの技法（精神分析）を精神医学の世界に導入した。もし、夢に何の意味もないならば、我々は夢の存在価値も、その奇妙な特性についても説明が不可能になるであろう。従って、我々は、顕在的に見た時の物事が、夢の中で歪められてしまった物事に、潜在的、本質的存在理由があると想像するのである。

（２）心的装置[2]

フロイトは夢分析の研究から、夢の本質的な部分は、日常生活に於いて自己の満たされない事柄に対する願望充足であると考えた。この願望は無意識から発しており、無意識はあらゆる事を願望し、その充足を求めて止まない。夢はそれを、視覚、言語、情動作用等によって行おうとするが、その願望が量的に多過ぎたり、不道徳であったりする為、歪曲を加え、都合の良いものに変えてしまう。夢の歪曲は、あらゆるものを道徳の下に従わせ様と務める検閲行為であり、検閲を行うものは、睡眠によって弱められている覚醒時の判断に承認されているものである。検閲を加えられるものは、倫理、美、社会的見地と言ったものからは許し難く、嫌悪なくしては考えられぬものであり、粗暴な利己主義や、禁ぜられた対象を最も好む。こうしたものは、フロイトに言わせれば、すべての人間に持たされている無意識に潜むリビドー（性的衝動）である。夢は元々この様に隠される運命的な潜在内容を持つのである。

この夢研究によって得られた、意識・無意識の位置関係や仕組み、即ち便宜上の心の構造をフロイトは心的装置と呼んだ。無意識中の個々の心の動きは、検閲所（これは通例、社会一般の道徳規範と呼ばれているもである。）の検閲行為によって抑圧を受ける。許されて意識体系に移動しても、そこは前意識であり、心の感覚器である意識に注目されなければ意識化されない。夢を見る場合、先ず前意識に存する覚醒時に関心を寄せた物によって、無意識の願望が刺激され興奮する。その願望は抑圧を受け、無意識中の連想作用によって、どうでもいいような物への移動、又、統一的、象徴的作用による圧縮等の手段で対処し、意識化させ、夢を形成する。つまり夢は、記憶された日中の外的刺激で興奮した無意識の願望を、現実的、社会的要求に沿う様に努力し検閲を通して充足させ、その興奮を鎮める。それが心の機能なのである。そして、フロイトはこの夢の機能を、日常の心の一般的機能と同質と考えた。心は、ある何らかの刺激によって興奮させられた心の不快を快に、つまり興奮を取り除く事のみに働く。この場合、心はそうした働きを段階的に行う。つまり、

Ａ）感覚興奮を直ちに運動によって放出したり、情動の表出により放出する。

Ｂ）それが何らかの現実の障害により禁止された場合、かって（幼児期）の満足体験の感覚、知覚を蘇らせ、代償満足を得る（知覚同一性）。

Ｃ）やがて心は、代償満足では外的刺激からの解放は得られぬ事に気づき、退行を止め、外界に働きかけ、外界による知覚同一を得る（思考同一性）。

心が外界変革の為に消費するエネルギーに比べれば、退行の為に用いるエネルギーは小量であり、当面の不快発展阻止には得る所が大きい。従って、睡眠時等に、弱く、幼児的になった自我は安易に、この退行にすがりつく事になる。この事をフロイトは、神経症研究に於いて確認する。[3]

（３）リビドー（性的衝動）

生まれた時から持ち続け、無意識に潜み、発達するリビドー（性的衝動）が現実の強い拒否に合った時、心は自らの欲動と、現実との闘争によって高められた興奮を鎮め様とする。この手っ取り早い方法が、退行

による知覚同一の獲得であり、その為、心は、満足の得られなかった過去の幸福な時期に押し戻される。この心の幼児的手段が神経症であり、過去の幸福な時期であった幼児期の記憶は、幼児性の為に真偽も曖昧であり、従って、神経症の症状は奇妙なものとなる。

フロイトは、神経症患者の幼児性と性的欲動の関連から、幼児も性的関心を持つ者とし、幼児はその満足の為に自己を取り巻くあらゆる環境、又、自己の身体をも対象にする事を確認した。幼児はその無知性の為、あらゆる取り違えをする。

幼児は正常な生殖行為には、対象を要求せねばならない命令を内部に持つが、安易にその対象を自己に求める。又、対象の質も、それに与えるべきリビドー・エネルギーの量も知らぬ為に、異常な程ナルシズム的関心で自己の心身に満足を求めたりする。幼児性愛はこの様に支離滅裂で、ある対象への集中化、組織化の傾向を持たず、個々の部分欲動が、それぞれの器官快感を求め、別個に活動する。そして色々な過程（前性器的体制の出現による緩和）をへて、部分欲動が性器の優位の下に服従する事により、成長を遂げ、性愛が生殖機能に服従して行くこの過程に於いて、性の欲求のある部分が最後の目的に到達しているのに、他のある部分は幼児期に取り残されていると言う事が起こりうる。それをリビドーの固着と呼び、その素因は、幼児が素質として先史的体験によって手にした性的傾向と、幼児期に偶然呼び起こされた外的影響の二つである。神経症の症状形成は、現実の外傷的体験によって拒否されたリビドーが、退行によってこの固着部分へ戻る事であるが、すでに自我の中に生じている社会的、道徳的見地を承認する部分によっても、内的拒否を受ける為、リビドーは自らの欲望と、現実と、自我の厳格さとの闘争の中で行き場を失い、様々な歪曲を受けた派生物を作り出し、それに固着する。これが神経症の症状であり、リビドーは無意識と固着を経て、ついには非常に制限されているが、現実的な満足を得る事となる。

症状は何らかの形で幼児期の満足を反復するが、かっての満足も今では、現実の厳格さと教育された自我によって、嫌悪の念を呼び起こすにはおかず、葛藤から生じた検閲によって歪められ、通例、苦悩の感覚に変化する。神経症患者は望んでこの苦悩を受け取る。従って、神経症患者の奇妙な症状にも意味があり、患者にとっては、その一つの症状のみでしか、危険な程高められた興奮量を鎮め得ないのである。

（４）結び

フロイトの精神分析療法は、この打算方向に暴走するリビドーを、自我が再び自由に使用出来る道を与え様とする。精神分析の技法により、症状を解釈し、症状を生じせしめた葛藤を再び蘇らせ、技法家の教育によって自我を変化させ、無意識を意識上に上昇させ自我の拡大を図る。この大人に成った自我はリビドーに対し、何らかの満足を容認し、自我自身も、可能性として自ら現実を変化させる力を持つ事を大いに認識させる事によって、リビドーに対し尻込みしなくなる。こうしてリビドーは、大人になった自我に安心して服従するのである。

以上の夢理論、神経症理論、リビドー論からフロイトは、心の仕組みを体系化し、日常に於ける一般的な心の性格を明らかにした。

心が目指す唯一のものは外界からの刺激によって高められた興奮を鎮める事である。この事は常に無興奮の状態を保持する事を意味する。無興奮状態、それはつまり死・タナトス（Thanatos）ではないかとフロイトは考えた。[4]

あらゆる生命の目的は死であり、自己保存の本能も、生が死への独自の道を守ろうとする試みである。何故なら、心は不快から快へ、興奮量の減少の為だけに働くからである。生命は、奇跡によってか、現実の偶発的な事柄によってか、生じせしめられ、その段階ですでにそれを不快と感じた。それを快にする為に、元の無機質の状態（死）を願望した。

以上が、フロイト思想の外観である。見方によれば、フロイトの考え方は淋しく、厳しいものである。

最後に、P．ゴーギャンの言葉を記して終わりとしよう。

わたしたちはどこからきたか、
わたしたちはなにか、
わたしたちはどこへゆくのか、

主要参考文献

（1）フロイト著作集1：高橋　義孝訳、ー精神分析入門（正・続）ー、人文書院、東京、1976.

（2）フロイト著作集2：高橋　義孝訳、ー夢判断ー、人文書院、東京、1980.

参照文献

（1）河合　隼雄編：イマーゴ（vol.2-12、夢）、藤田　博史著：ー夢の構造ー、118-134参照、青土社、東京、1991.

（2）ポール・リクール著：久米　博訳、ーフロイトを読むー、289-293参照、新曜社、東京、1982.

（3）新副　尚武編：精神医学大事典、ー（項目、退行）ー、583-586参照、講談社、東京、1989.

（4）町沢　静夫著：イマーゴ（vol.3-3、エロスとタナトス）、ー死の本能（タナトス）はあるのかー、94-105参照、青土社、東京、1992.

付記：過去1年間に学生相談室で取り扱った件数を相談内容別に集計した下表を参照して頂きたい。

相談内容別取扱件数
（平成3年1月18日～平成4年1月1日）

相談内容	件　数	%
1．学業全般	40	36
2．学生生活	32	29
3．対人関係	15	13
4．精神衛生	14	12
5．進路問題	7	6
6．健康問題	4	3
7．　計	112	100

（受理　　平成4年3月20日）